

1999 年度学会賞受賞作品・授賞理由

◆石川賞ぼくたちのまちづくり

福川 裕一(千葉大学大学院教授)

青山 邦彦(絵本画家)

〈選考理由〉

最近では「都市計画」よりも「まちづくり」という用語が一般に使われることが多い。まちづくりには、まちの計画に住民として積極的に関わり得るシステムの必要性が込められている。都市計画の制度上も住民の意見を反映する方策が整備されつつある。また、地域特性を活かしたまちづくりの試みが住民の様々な活動により計画され実現している都市の例が見られるようになった。しかし、まちづくりの内容、方法を的確に理解し、分かり易く伝えることはなかなか難しい。重要なことは自分たちの「まち」に常に関心を持ち、まちの形成過程と何を大切にすべきかを認識し、安心・快適・活力を発揮する望ましいまちに向けて行動することであろう。

「ぼくたちのまちづくり」の特徴は、上記のようなまちづくりの本質とも言うべき部分を生徒と教師の会話という形を通して、平易な文章と巧みな挿絵によって「絵本」に仕上げたことにある。以上から本著作は都市計画の普及と、まちづくり教育という観点において貢献するところが大きく考えられ、まさに石川賞に相応しいと評価された。

◆計画設計賞ユーカリが丘ニュータウン計画

嶋田 哲夫(山万(株)代表 代表取締役社長)

則武 広行(ユーカリが丘自治会協議会代表 会長)

〈選考理由〉

都心から30kmの千葉県佐倉市にある本ニュータウンは30年近く前に着手され、時間をかけて開発されてきた。まちづくりへの継続的な取り組みが次のような成果を挙げてきている。

(1)商業・文化センター、CATV、福祉施設・サービスなどのハード・ソフトが現代的な

視点、センスのものとして充実している。

(2)VONAの導入により、従来の自動車依存型開発とは一線を画した計画になっている。また駅前広場やペデ等の計画・デザインにも見るべきものがある。

(3)自然的形態を残した公園等とともに周辺には農地なども配置され、地域の風土が生かされたNTとなっている。今後の都市計画のコンセプトとされる「コンパクト・シティ」の片鱗が見られる。

(4)長期間にわたる開発期間の中で社会経済の変化を的確に捉え、時々の暮らしのニーズに対応してきており「持続的発展」の文脈に乗った開発である。

以上を総じて本計画は「20世紀の都市計画が生み出したニュータウン」として評価されるとともに「それをさらに21世紀につなぐこと」の可能性が期待され、開発事業者と住民組織のパートナーシップも含め、計画設計賞に相応しい成果であると判断された。

◆計画設計賞初台淀橋街区建設事業における企画と計画・設計および事業マネジメント

河田 剛(大阪ビジネスパーク開発協議会代表 総局長)

〈選考理由〉

近年、工場跡地等を活用した市街地開発事業が数多くなされてきている中であって、大阪ビジネスパーク(OBP)は、その初期に着手された事業であるにも拘わらず(1976年土地区画整理事業認可)、周知の通り今日においてもなお、わが国を代表するプロジェクトの一つとしてその位置を獲得している。これは、地区が今日、大阪市東側の業務核として、都市構造上の明確な位置づけを得て、広く圏域の活力の涵養に寄与しているとともに、高いレベルで管理がなされている環境が地域のアメニティの向上に寄与していること等によっている。

事業は、立地企業によって構成される大阪ビジネスパーク開発協議会が中核となつて、大阪市の協力のもとに進められ、その後においても同協議会は街の運営、管理に一貫して取り組んでおり、事業に係わる上記のような評価は協議会の努力に負うところが大きい。また事業の推進や魅力的な都市デザインの展開に係わる制度活用上の工夫や公民協力の構造、さらにその後の運営、管理等都市経営的側面へのコミッ

トは、早い段階の事業として、また今日でもなお、わが国の都市計画や街づくり事業の発展の上で示唆するところも大きく、計画設計賞にふさわしいものとして高く評価される。

◆石川奨励賞「まちづくりがわかる本—浦安のまちを読む」の制作

梶島 邦江(浦安まちブックをつくる会 代表)

〈選考理由〉

本作品は、浦安に住む都市計画の専門家達が市民向けに制作した本である。本の作り方に特徴があり、専門家だけでなく、地元の中学生在が参加し協力している。浦安の町の成り立ちやその特徴が非常に分かり易く説明されるとともに、一般の人には分かり難い法定都市計画などの内容をうまく解き明かしている。

本作品は、都市計画の基本的な考え方や仕組み、方法を市民の視点から身の回りの「まち」を通して、分かり易く説明することに挑戦している。本書の成り立ちとしては、当然のことであるが、浦安という、ある意味では特殊な埋立地に生まれた町の物語であるために、広く一般性がある内容ではないが、こういう本を他の、浦安以外の地域で作るときには大変参考になる本であろう。

これらの点を総合して、石川奨励賞に相当すると判定した。

◆石川奨励賞多摩都市計画史

池田 禎男((財)東京市町村自治調査会専門研究員)

〈選考理由〉

この作品は、戦前、戦後を通じて首都東京の影響をうけて多様に成長発展した東京都多摩地域の都市計画の歴史を、主にゾーニング(地域制)の視点から描出した書物である。昭和初期八王子市に始まる用途地域指定、戦前の防空構想による空地地区指定、戦後の用途地域・空地地区の変更、首都圏整備法による近郊地帯(グリーンベルト)指定の挫折、1968年法による区域区分と新用途地域の指定などにおいて、都市計画のめざした土地利用の目標像と実現手段である土地利用規制の効果の関係を検証している。

それぞれの地域指定当時の計画図、計画書、関連行政資料、都市計画地方委員会・地方審議会の議事録などを綿密に追跡した労作であり、用途地域が導入されて以降の土地利用を柱とする都市計画行政のあり方を豊富な体験に基づいて研究している。用途地域制について総合的、体系的に論じた数少ない業績の一つであり、土地利用行政担当者、専門家、研究者の貴重なテキストとして高く評価する。

◆計画設計奨励賞都通4丁目街区共同再建事業

間野 博(県立広島女子大学教授)

森崎 輝行(森崎建築設計事務所所長)

長濱 萬藏(都通4丁目街区再建組合代表 理事長)

小野 博保(都市基盤整備公団関西支社震災復興事業本部代表 本部長)

笹山 幸俊(神戸市代表 市長)

〈選考理由〉

阪神大震災からの復興事業において、土地の所有者1名、土地・建物所有者4名、借地権者19名、借家人9名、合計33名の権利者の共同により、木造密集市街地を不燃建築街区に再建した作品である。震災前の老朽化木造長屋5棟、40戸を、2棟の連接するRC造共同住宅、60戸に再建した。

多数の権利者の多様な意向に対応し、所有形態にふれずに利用形態の最適化を図る「資産独立型空間共有型」共同建て替え手法、借り上げ公営住宅の導入手法などの様々な新手法を組み合わせ、結果としてはシンプルな形態にプランニングし、そしてこれをディベロッパーとしての公団参画と権利者・関係者の緊密なコーディネートにより実現した。作品は、共用空間の設計に改善すべき点があるものの、上記の新手法を取り入れたプランニングは、今後の密集市街地整備の拡大に活用できるヒントを多く含んでいる点で、将来性、発展性が評価できる。

◆論文奨励賞高齢者の交通負担感を反映したコミュニティバスの需要予測に関する基礎的研究

都 君夔(名古屋工業大学助手)

《選考理由》

本論文は、大都市郊外部での高齢者のバスサービス確保という視点からコミュニティバスに着目し、高齢者対応型コミュニティバス導入において重要な交通負担感を反映したバス利用者の需要予測方法を提案したものである。

論文は大きく分けて3つに分けられ、最初の部分で、高齢者対応型コミュニティバス整備の必要性、事例などが取り上げられてコミュニティバスの性格が論じられている。第二は、ケーススタディ地区でのアンケート調査などを基に現在のバスサービスに対する評価と高齢者対応型コミュニティバス利用意向から求められるサービス特性の設定などを行っている。第三の部分は、高齢者の交通負担感を反映した高齢者対応型コミュニティバスの需要予測方法の提案をまとめ、実際の需要予測を試みている。

本研究は、需要予測を開発するうえで高齢者の特性を踏まえている点に新規性がある。これから高齢社会を迎えるわが国の都市社会において意義があり、実用性も期待される研究である。但し、最終的に得られた結果からコミュニティバスの可能性や運営主体の負担等への具体的な提言が欲しかった。

◆論文奨励賞居住者の環境評価に基づく自然環境共存型の住宅地像に関する研究

澤木 昌典(大阪大学大学院講師)

《選考理由》

本研究は、都市圏縁辺部などの類型化された郊外住宅地毎に、それぞれの既居住者の居住環境に対する評価やニーズを詳細に分析している。その中で特に自然環境に着目して居住者のニーズなどを把握し、今後の自然環境共存型の住宅地像を考察している。この研究では自然環境を生物の生息空間として、更に宅地内の緑を自然環境の一部として捉えている。すなわち居住環境における公と私の緑を一体的に捉えることにより、両者に配慮した郊外住宅地のあり方を検討している。

この種の研究は既に様々な切り口から研究されているが、本研究ではそれらを整理体系化し、その上で本研究のテーマの位置付けを明確にして、論を進めていることは評価できる。

結論に至る過程で、生息する生き物を単に「好き—きらい」の指標で捉えている点や自然環境共存型住宅地を実現する制度手法の検討が不十分な点など課題もあるが、分析結果を踏まえて自然環境共存型の住宅地のあり方を考察し、提案している内容は示唆に富むものであり、論文奨励賞に値する。

◆論文奨励賞農村の観光地化の過程に関する研究—大分県湯布院町の観光地形成の過程分析—

猪爪 範子(地域総合研究所)

〈選考理由〉

東京農業大学に学位請求論文として提出された本論文は、長年、地域プランナーとして湯布院町の地域づくりに深く関与してきた著者が、これまでの湯布院町における農村型観光地の形成過程を総括的にとりまとめたものである。本論文では、湯布院町の事例を通じて、農村型観光地形成の時系列的変化、農村型観光地形成の要因が、よくまとめられている。特に著者は、住民運動や行政などの景観形成への取り組みが大きく影響することを指摘している。この論文は、自己の関与とその成果を誇るあまり記述が主観的になりがちなプランナーの著作が多い中で、学術論文として、湯布院町が歩んできた道を客観的に捉えようとした努力のあとが伺われ、大変好感がもてる。地域づくりの最前線で活躍するプランナーがその成果を集大成することは、都市計画の総合的発展にとって貢献するところ大である。著者のようなベテランが、このような論文をまとめあげたことを、ともに喜びたいと思う。